

ぼくの図書館体験2.0

友利 修

ぼくの図書館体験を告白します…

というのは、実は、25年前に『ぼるらんど』第100号に寄せた文の書き出しである。読み返してみると、ここに引用するのははばかられる稚拙な文だが、そこには、音楽学を学ぶために他の大学からくたにたち音大に入学した大学院生がその図書館の環境のすばらしさから受けたカルチャーショックが綴られていた。楽譜、音源、研究書の基本的なものが網羅的に收藏され、他の場所なら数週間はおぼつかかる資料収集が2時間ほどの間に済んでしまふ環境にきたことのありがたさ。ある主題について、たまたま手に入る資料から出発するのではなくて、直接関連する資料をできるかぎりすべて把握して臨むという方法が可能であることを知った興奮。

4半世紀たつて、そのありがたさの気持ちは変わっていない。それどころか、その年月の間に、それを新たにする経験することになった。

2年半前に帰国するまで、フランスの中都市で10年余を音楽学の出なおし学徒として過ごした。音楽学の伝統もあり、ドイツにもフランスにも属していたことがあるその都市の大学は、音楽学者にとつて比較的恵まれた環境を持つているのだが、音楽資料の量や使い勝手についていえば、くにたちとは比べものにならないほど限界があった。仏・独の他の都市の大学へ資料をもとめて赴いたが、やはりくにたちのすばらしさを再実感した。そもそも、音楽高等教育機関と総合大学の両方を行き来しなければ、研究書と楽譜と音源がそろわないのは多くの都市でそれが普通といつていい。英独仏の研究書が等しい重みで收藏されていることは、逆説的だが、くにたちと

違って、仏・独の大学ではあまり望めない。

不自由さの思い出しがきりがない。復刻版で容易に閲覧できるはずの18世紀の資料が、なまじオリジナルを所蔵しているため貴重書扱いで複写禁止だったとき。19・20世紀の楽曲分析の授業を担当していて、楽譜、音源、研究書でできるだけ参照したいのに、楽譜が1つ見つければせいじつぱいだったとき。一方、複写できない資料をPCで全部打ち直したことや、研究論文の探索に時間をとられることなく否応なしに1つの曲に楽譜だけからじっくりと向き合うのがあたり前になったことは、研究者の訓練としては、ポジティブな面もあつたとは言える。そんなことをしているうちに10年余が過ぎ、古巣に戻り、ありがたうと毎日つぶやいている。

もちろん、25年前と何もかも同じではない。この10年の間に、文字を読み、録音された音を聴くための環境は、激変した。最新の論文や古い資料がネットで出回るようになった。おかげで、どこでも書架になった。私の小さな携帯電話には、600点あまりの古典文学がストアされ、またそこから最新版の*New Grove Dictionary of Music and Musicians*にアクセスすることもできる。

将来あらゆるものが電子化されたら、図書館は不要になつていくのだろうか。物理的な収納スペースという意味では大変化があるだろう。一方、選ぶということの重要性が前より増している。そこで変わらないのが人の役割だ。情報の海の中で溺れそうになつていないことに気づくとき、資料を選び、体系づけ、探索の手伝いをしてくれる人々によつて図書館が成り立っていることのありがたさを思う。